

イヌを連れていることが援助行動に及ぼす効果：場面想定法を用いて

野瀬 出^{1)*}・柿沼美紀¹⁾・政本 香²⁾・林 幹也³⁾

- 1) 日本獣医生命科学大学獣医学部
- 2) 松山東雲女子大学人文科学部
- 3) 明星大学心理学部

A study of helping behavior for dog walkers using the scene imagination method

NOSE Izuru^{1)*}, KAKINUMA Miki¹⁾, MASAMOTO Kaori²⁾, HAYASHI Mikiya³⁾

- 1) Faculty of Veterinary Medicine, Nippon Veterinary and Life Science University
- 2) Faculty of Human Sciences, Matsuyama Shinonome College
- 3) Faculty of Psychology, Meisei University

緒言

これまでの動物介在介入研究により、イヌの存在がヒト間の向社会的行動に影響を及ぼすことが報告されている (e.g., Eddy et al., 1988)。しかし先行研究は行動観察を用いて検討されており、イヌと接触する可能性があることから参加者のサンプリング・バイアスが混入していると考えられる。本研究では、イヌを連れていることが援助行動に及ぼす効果について場面想定法を用いて検討した。イヌと接触しないため、イヌが苦手な人々も研究対象にすることが可能となる。

方法

調査参加者は、イヌの飼い主 264 名（男性 110 名、女性 264 名、平均年齢 49.3 歳）および非飼い主 232 名（男性 114 名、女性 118 名、平均年齢 48.1 歳）であった。データ収集はインターネット調査会社（クロス・マーケティング）に依頼した。参加者には Web 画面上で調査内容について説明し、参加の承諾を得た。回答は匿名で行われ、信頼性の低い回答はデータ解析から除外した。データ収集期間は 2019 年 9 月 2 日～3 日であった。

援助行動に関して、場面想定法による調査を実施した。例えば「公園に犬を連れている人（X さん）がいました。X さんは道に迷って同じ場所をウロウロしています。あなたは X さんに道を教えてあげますか？」という質問文に対して 5 段階（1 全くそう思わない～5 非常にそう思う）で評定を求めた。質問文は 3 人の

登場人物（一人で歩いている人、子どもを連れている人、犬を連れている人）、2 種類の援助内容（迷っている人に道を教える、排水溝に落としたカギを取り出すのを手伝う）、および 2 種類の場面（援助場面、被援助場面）の組み合わせにより構成されていた。援助場面では参加者が登場人物に対して援助すると思うか、被援助場面では登場人物が参加者に対して援助すると思うかについて評定した。

上記に加えて、登場人物の印象評定、イヌと子どもに対する好感度、自分がイヌ好きであることの認識等について回答を求めた。

結果と考察

全体の傾向を把握するために、群（飼い主・非飼い主）×場面（援助・被援助）の 2 要因の分散分析を実施した結果、飼い主が非飼い主よりも評定得点（援助しようと思う程度）が高く ($F(1, 494) = 27.00, p < .001$)、援助場面が被援助場面よりも評定得点が高くなっていた ($F(1, 494) = 351.90, p < .001$)。交互作用は有意ではなかった。以降は群・場面ごとに、登場人物（一人・子連れ・イヌ連れ）×援助内容（道案内・カギ取り出し）の 2 要因の分散分析を実施した。

飼い主の援助場面においては、登場人物の主効果が有意であった ($F(1.98, 519.83) = 9.42, p < .001$)。多重比較の結果、一人よりも子連れや犬連れの人に対して評価得点が高かった。

* 連絡先：inose@nvlu.ac.jp

非飼い主の援助場面においては、登場人物と援助内容の交互作用が有意であった ($F(2, 462) = 16.31, p < .001$)。下位検定の結果、道案内においては一人や犬連れの人よりも、子連れの人に対して評定得点が高くなっていた。カギ取り出しにおいては、一人よりも犬連れや子連れの人に対して評定得点が高くなっていた。

飼い主の被援助場面においては援助内容の主効果が有意であった ($F(1, 263) = 15.68, p < .001$)。カギ取り出しよりも道案内において評価得点が高くなっていた。

非飼い主の被援助場面においては登場人物と援助内容の交互作用が有意であった ($F(1.97, 454.06) =$

$13.65, p < .001$)。下位検定の結果、犬連れと子連れの人に対しては、カギ取り出しよりも道案内において評定得点が高くなっていた。

飼い主群の参加者は、犬連れの人に対しては子連れの人と同程度に援助すると評定していた。一方、非飼い主群の参加者は、援助の負担が大きい場面（カギの取り出し）においては、犬連れの人を子連れの人と同程度に援助すると評定していた。非飼い主群は、飼い主群よりもイヌへの好感度が低く、犬連れの人に対する印象も良くなかったが、困窮度が高い状況では犬連れの人に対する援助行動が促進されている可能性が示唆された。